

臨地実習における看護学生の
「他職種との連携」に関する学習の実態（第2報）

長澤利枝

伊東志乃

前野真由美

The student's Learning about Cooperation of the Nurse
and Other Profession in Clinical nursing Practice
(the second Report)

Rie NAGASAWA

Sino ITO

Mayumi MAENO

・研究目的

近年、医療の高度化や在院日数の短縮化に伴い、患者及び家族の抱える問題の解決のために、看護職と他職種との連携は欠くことのできないものとなってきている。そのような状況を背景として、看護学生の臨地実習においても「他職種との連携」の重要性を学ぶことが求められている。

しかし、実際に看護学生が臨地実習を通じて、それを具体的にどのような場面を通じて学びとっているのかについては、実態が十分に明らかにされていないのではないかと考える。

昨年度の調査では、看護学生達が臨地実習での経験や授業を通じて、看護職と他職種との連携の必要性に対する肯定的意識を有していることがほぼ明らかになり、さらに実習内容・方法が、学生達の認識及び学習効果に影響を及ぼしており、それに対する工夫が必要であることが示唆された。

本年度は、昨年度の調査で十分に明らかにすることができなかった「学生達が臨地実習のどのような経験・場面を通じて、他職種との連携の必要性を実感したか」ということを中心として研究を行い、「他職種との連携」を臨地実習を通じて学習していくための、効果的方法を検討する一資料とすることを目的とする。

・研究方法

1. 研究対象

本学第一看護学科3年生のうち調査に同意が得られた、臨地実習における10グループ計58名の学生。

2. 調査期間

平成13年7月, 11月~12月

3. 調査方法

以下の2回に分けて、同内容の質問紙調査を実施した。

- 1) 前期の臨地実習が終了する週の帰校日 or 最終日
- 2) 後期の臨地実習が終了する週の帰校日 or 最終日

4. 調査内容

質問紙において以下の項目を調査した。

- 1) これまでに経験した実習の種類
- 2) 看護職と他職種との連携の必要性を感じた経験・場面について
 - 連携の必要性を感じた実習の種類
 - 連携の必要性を感じた他職種の種類
 - 連携の必要性を感じた場面
 - 経験・場面の具体的状況（自由記述）
 - の場面においてどう思ったか（自由記述）

5. 分析方法

- 1) 調査内容)及び)- ~ については、SPSS 統計ソフトを用いた単純集計及びクロス集計により分析した。
- 2) 調査内容) ・ (自由記述)については、文脈の中で捉えた特性を抽出しそれらを比較検討して、共通性・類似性を分析・整理している。(現在分析中)

結果及び考察

1. これまでに経験した実習の種類 表1参照

1回目の調査では、全員の学生が経験していた実習は「基礎看護実習」「成人看護実習」「老人看護実習」の3つであり、「成人看護実習」「訪問看護実習」「保健所・市町村実習」「精神看護実習」の4つについては、全員の学生が経験していなかった。
また、2回目の調査では、全員の学生がすべての実習を経験していた。

表1 これまでに経験した実習 複数回答,()内は%

実習の種類	1回目 N=54	2回目 N=58
基礎看護実習	54(100)	58(100)
成人看護実習	54(100)	58(100)
成人看護実習	43(79.6)	58(100)
成人看護実習	0(100)	58(100)
小児看護実習	37(68.5)	58(100)
母性看護実習	40(74.1)	58(100)
老人看護実習	54(100)	58(100)
訪問看護実習	0(100)	58(100)
保健所・市町村実習	0(100)	58(100)
精神看護実習	0(100)	58(100)

2. 看護職と他職種との連携の必要性を感じた経験・場面について

1) 他職種との連携の必要性を感じた実習 表2参照

1 回目の調査では、「老人看護実習」が最も多く、以下「成人看護実習」、「成人看護実習」、「小児看護実習」、「母性看護実習」の順になっていた。「成人看護実習」、「訪問看護実習」、「保健所・市町村実習」、「精神看護実習」の4つについては、全員の学生が経験していなかったため、取り上げた学生はいなかった。「基礎看護実習」について取り上げた学生がいなかったのは、ほぼすべての学生が、3年生前期において経験したいずれかの実習の中で、他職種との連携の必要性を感じた経験を得ていたことが要因となったと考えられる。

2 回目の調査では、「訪問看護実習」が最も多く、以下「保健所・市町村実習」、「精神看護実習」、「成人看護実習」、「老人看護実習」、「小児看護実習」の順になっていた。「基礎看護実習」、「成人看護実習」、「成人看護実習」、「母性看護実習」の4つについては、取り上げた学生はいなかった。「基礎看護実習」について取り上げた学生がいなかったのは、1 回目の調査における要因と同様のことが考えられる。「成人看護実習」、「成人看護実習」、「母性看護実習」の各々の実習を取り上げた学生が見られなかったのは、1 回目の調査で多くの学生達が、それら3つの実習における場面を取り上げて記述していたため、2 回目の調査ではそれとは異なる実習や、調査した時点から比較的近い実習における場面を取り上げて記述したことが要因となったと考えられる。

2 回の調査を全体的に捉えた場合、「訪問看護実習」、「老人看護実習」を取り上げた学生が特に多い。この要因としては、病院以外の場所（老人保健施設、在宅等）で療養生活を行う患者・家族に対して、各種社会資源を活用し QOL を尊重しつつ継続的な援助を提供していくためには、看護師以外にも医師、介護職、リハビリ職等の各種職種が密に関わる必要があり、その様子を実習中に学生達が直接見聞きする機会も多いため、連携の必要性をより強く実感することができたということが考えられる。

表2 他職種との連携の必要性を感じた実習 複数回答,()内は%, 順位は合計に基づく

実習の種類	1回目 N=54	2回目 N=58	合計 N=112
訪問看護実習	0(92.6)	31(53.4)	31(27.7)
老人看護実習	20(37.0)	2(3.4)	22(19.6)
成人看護実習	13(24.1)	0(96.6)	13(11.6)
保健所・市町村実習	0(92.6)	13(22.4)	13(11.6)
成人看護実習	9(16.7)	0(96.6)	9(8.0)
小児看護実習	6(11.1)	1(1.7)	7(6.3)
精神看護実習	0(92.6)	5(8.6)	5(4.5)
成人看護実習	0(92.6)	4(6.9)	4(3.6)
母性看護実習	2(3.7)	0(96.6)	2(1.8)
基礎看護実習	0(92.6)	0(96.6)	0(94.6)
欠損値	4(7.4)	2(3.4)	6(5.4)

2) 連携の必要性を感じた他職種 表3参照

1 回目及び2 回目の調査において最も多かったのは「医師」であり、以下、「PT」、「その他」、「OT」、「栄養士」、「MSW(医療ソーシャルワーカー)」、「歯科衛生士」、「薬剤師」、「ST(言語療法士)」、「事務職員」、「看護助手」、「臨床心理士」、「放射線技師」の順になっていた。

2 回の調査共に「医師」が第1位となった要因は、昨年度の調査結果と同様に、実習を通じて学生達が最も接する機会が多い他職種であり、ナースステーション等にて看護職との関

わりが多く見られる他職種であることが考えられる。

また、昨年度の調査結果と同様に、「PT」「OT」「栄養士」の順位が高いのは、「成人看護実習」「成人看護実習」「成人看護実習」「老人看護実習」等で、多くの学生が担当患者のリハビリテーション場面に接したり、栄養士による栄養指導の見学を行っていたことが要因となったと考えられる。その一方で、昨年度の調査結果と同様に、「ST」「放射線技師」の順位が低かったのは、実習を通じて学生達がこれら他職種と直接接する機会や、看護職とこれら他職種との関わりの場面に接する機会がかなり少なかったことが、要因となったと考えられる。

一方、「臨床心理士」の順位が、1回目の調査結果よりも2回目の調査結果の方が高くなったのは、前期において全員の学生が経験していなかった『精神看護実習』を、後期においては全員の学生が経験したことが要因となったと考えられる。この背景として、「臨床心理士」が臨床において、精神科への配属が中心となっている現状が影響を及ぼしていることも考えられる。

これらのことから、学生達が他職種に対して連携の必要性を感じるのは、臨地実習の中で、その他職種と直接的にどれだけ関わる機会があったか、または、その他職種と看護職の関わりの様子をどれだけ見る機会があったかということと、大きく関連していることが窺われた。

表3 連携の必要性を感じた他職種 複数回答,()内は%

職種	1回目 N=54	2回目 N=58	合計 N=112
医師	40(74.1)	45(77.6)	85(75.9)
P T	31(57.4)	18(31.0)	49(43.8)
その他	18(33.3)	29(50.0)	47(42.0)
O T	20(37.0)	20(34.5)	40(35.7)
栄養士	19(35.2)	17(29.3)	36(32.1)
M S W	13(24.1)	20(34.5)	33(29.5)
歯科衛生士	3(5.6)	19(32.8)	22(19.6)
薬剤師	8(14.8)	12(20.7)	20(17.9)
S T	7(13.0)	7(12.1)	14(12.5)
事務職員	5(9.3)	8(13.8)	13(11.6)
看護助手	10(18.5)	2(3.4)	12(10.7)
臨床心理士	2(3.7)	7(12.1)	9(8.0)
放射線技師	6(11.1)	2(3.4)	8(7.1)

3) 連携の必要性を感じた場面 表4参照

1回目及び2回目の調査において最も多かったのは「看護職の言動を見て」であり、以下、「患者・家族から話を聞いて」、「その他」、「他職種から話を聞いて」、「他職種の言動を見て」の順になっている。

2回の調査共に「看護職の言動を見て」が第1位となった要因としては、学生達が看護実習として臨地実習に臨んでいることが前提にあり、看護の実践者としての看護職の各種言動に、常に注目しているためではないかということが考えられる。

次に1回目及び2回目の調査において「患者・家族から話を聞いて」が第2位となっている要因としては、学生達が実習の中で、担当患者やその家族と接する機会が多いため、患者・家族の医療者側への要望等を聞く機会があり、それを通じて患者・家族側に立って現状を考えながら、他職種との連携の必要性を実感する経験を得ていることが考えられる。

また、2回の調査共に「他職種から話を聞いて」や「他職種の言動を見て」を選択した学

生が少なかったことから、学生達が実習中に他職種と直接関わったり、他職種の言動を見る機会が看護職に比べて少ないことや、学生自身がそれらに着目する度合いが低い傾向にあることが窺われた。

表4 連携の必要性を感じた場面 ()内は%

場面	1回目 N=54	2回目 N=58	合計 N=112
看護職の言動を見て	23(46.3)	35(60.3)	58(51.8)
患者・家族から話を聞いて	8(14.8)	6(10.3)	14(12.5)
その他	9(16.7)	5(8.6)	14(12.5)
他職種から話を聞いて	5(9.3)	5(8.6)	10(8.9)
他職種の言動を見て	3(5.6)	4(6.9)	7(6.3)
欠損値	6(11.1)	3(5.2)	9(8.0)

4) 経験・場面の具体的状況
現在、整理・分析中。

5) 4)の場面についてどう思ったか
現在、整理・分析中。

・まとめ

今回の研究により、看護学生達が他職種に対して連携の必要性を実感するのは、臨地実習の中で、その他職種と直接的にどれだけ関わる機会があったか、または、その他職種と看護職の関わりの様子をどれだけ見る機会があったかということと大きく関連していることが推察された。

また、これに関しては、昨年度の研究においても示唆された、学生達が経験する実習内容・方法(他職種による講義を設定したり、多職種による合同カンファレンスへの参加を促す等、意図的に他職種と接する機会を提供しているかどうか)からの影響も大きいことが窺われる。

さらに、具体的にどのような場面を通じて連携の必要性を実感したかについては、整理・分析中のため、前述の結果とも考え合わせながら検討していきたい。

なお、今回の研究の最終的な結果については、平成15年度静岡県立大学短期大学部研究紀要にて報告する予定である。

(2003年3月19日受理)